

# 高 校 生 の 詩 二

— 詩集「りべらる」の歩み その二 —

薬 師 寺 大 馬

ここから始まったのである。

## 二

さて、それでは個々人の詩作がどのように発展するか、三人の作品を通してその足跡を追ってみたい。

まず、小宮順一の詩とその問題点を考えてみる。

### 冬の歌

冬の怒りだるうか

ガラスを貫き不気味な吠え声

冬の憤りだるうか

黒煙があんなにも吹き飛んでいるとは

よしおれも飛び出そう

息がつまって足がへし折れるほどに

冬といっしょに走ってやろう

「私の詩は、まずことばの組み合わせからくる美しさから始まりました。とにかく、美しい単語で飾り立てようと欲してしまし  
た。」と一人の生徒が述懐するように、その意識としての出発点  
は、美文的・装飾的なものにあつたようである。しかし、このこと  
ばは、詩においてはことばそのものが詩であるから、ことばによつ  
て詩をどう組み立てるか、どう表現するか的過程のむずかしさ、こ  
とばに対する態度を反省し始めたものとみてよい。

こうしたところへ、極めて鋭い感覚を持った生徒が登場したこと  
で、詩に対しての思考をさらに深めさせたことは明らかである。詩  
集第七号に、その驚きを次のように述べている。「私の狭小な認識  
世界における原君の出現は、その愚鈍な脳天を粉碎し尽してしまつ  
た。文章に対して私が今までとってきた態度、思考が、何と浅薄な  
あさましいものであつたかをいやというほどのみこまされた。低質  
だつたメッキノそれでも、これまでどうにか最も醜い本体を隠して  
いたメッキが、彼のひと素振でボロボロとはげ落ちた。」

詩への反省、新しい仲間の登場から、新しい詩の世界への展開が

振り返つたら見えた見えた  
四角いちつぽけなほこらが  
あんな中におれはいたのか  
足をしびらせあくびをしながら  
おれはいたのか

だが今は

心の絃がピンと張り切ったから  
冬のためにつまびこう

怒濤の歌を

(第七号 43・2)

この詩には、自我の世界に閉じこもりがちな彼が、自分を客観視しようとしているところが見られる。それは、いつか社会的な現実へと視線を向ける一つの過程なのだろうが、まだそこまで自分の思考が届かないようである。しかし、この詩の最後の連は、充実した若々しい青年の心を感じさせ、そこに人間的な内部からの力強い志向が読み取れる。

春の風と私

三月の風

そよ風とはいえ

病室を出たばかりの私にはこたえる  
りゅうまぢずむやてーべやらが

肉体に巣をかけているのだ

三月の風

なるほど新芽の香りが漂ってはきても  
かたるやちくのうやらでは  
知りようもなからう

三月の風

それは暖かく吹きくるはずなのに

三月の風

それはうららかな日々を運ぶはずなのに

私には秋風よりもうつろに

私には秋風よりもつたなく吹き過ぎる

さつきの天空は霞に満ちて

風よ おまえは素早く舞台を回せ

風よ ぐるぐる楽しく走れ

おまえにまかれて

病身の私は嘔吐する

(第八号 43・3)

事物に対する認識が深ければ深いほど、そこに繰り返し広げられる世界が感動を呼び起こすという立場からこの詩を眺めた時、甘さが目立つ。「三月の風、知りようもなからう」まではいいとしても、その後が単純な感傷に落ち込んでしまっている。そうしないためには、もっと自分の心の中を探ることがなければならぬ。そうすれば終わりの連がもっと生きたはずである。しかし、表現技巧としてのねらいが・部に見え、それは買ってもよいと思う。

えせ詩人

新刊の香気の中の事件

午前零時の虫けらは

蛍光管よりふと悩みながらおこちた

聖域であるところの詩語の真上

自称詩人は苦もなくひねり

象皮の間から彼の絶命音

指紋―せせこましい峡谷―埋もれた屍体

ぶいと捨て去る時間の膾入れ

.....

不定形な黒いごみ―よみがえった虫

ぞろぞろ活字を従れて這いずりまわる

宇宙音を吐きながら

ろう人形さん！

おまえさん どこで詩を詠んでいるんだね？

(第九号 43・4)

体言の多用が表現をひきしめていいる点、それと最後の連に大きな特色がある。この詩には皮肉ともいえる、それ以上に自虐的な面が強く出ている。発想は作者の思想の様々なものが、一つの動機をなしているようだが、「不定形な黒いごみ」という語句に共感を覚え、そこに作者の心にある、詩に対する一つの考え―形をなさないものへのいらだちを発見できる。ここから新しい詩が生まれるのだと思う。

春雷

傾いた机にはひとり

バラは去り

子犬の眠り

微粒子は地下へ

草色の風はひとゆれ

かすかな形が崩れかかるころ

どおみいそお―

もはや少女らの合唱

暗着の似合うユッカは白い

のん のん―のん―

絹糸のリズム

かたくななユッカの嘆きか？ 歎びか？

どおふあらあ―

ほんのり瓦が濡れ

しいれまそお―

そして 黒いドラムスの連打

子犬も少女も―ユッカも

春雷に怯えて泣いた

(第十号 43・5)

音楽の階音を背景に置く技巧が特徴である。そのせいか、春雷の一鳴りのように人の心をゆさぶるものがあり、ほのかな抒情を通し

て不思議な共鳴を見せている詩である。

### 恋した置き物

ぼくの前に頭のでっかい不格好な  
卑しい顔した奴がいる

ああ　それがガラスに映るぼくなんだって  
知った時から　幾夜泣いたか？

逞しかった熊公も　優しかった鹿公も  
しなやかな白い手に救われて　ひたすら  
今は　恋しているの。だろう

ぼくはどうかと言うならば

世話好きの売子さんさえ

——　あなたを愛しているんじゃないのよ  
お仕事だから仕方がなくてよ——

氷の原の立ちんぼは  
涙も無いし　笑顔は忘れ  
これじゃあだれも見むきはすまい  
そんな粗悪な置物なんぞ

それでもぼくは　ぼくを見上げる

さわやかに　ふいっと横切る春の少女ら  
ぼくの魂は　ほら　秋空にだって負けないよ

やっぱりこの子も素通りか

とうとうぼくは心に決めた

目撃者も無い深夜のこと

つるんつるんのスケートリンク

音も立てずに滑り始める

縦横無尽にふりつけて

よつんばいで狂い走る

いつかははみ出す銀盤の外

「カチン」とは

ぼくの知っている音となりました

### (第十一号 43・6)

彼の詩が他の生徒のものと違うのは、「突き放された」という感がなく、読み終えた時に救いのような心が発見できることである。自己に厳しくムチ打ったとしても、あるいは現代の世相を鋭くえぐり出したとしても、壊されたままの形では、何か後味の悪いものが残り、それを読む者はやりきれない。濡れた詩を書くか、乾燥した詩を書くかは本人の生得的な資質にもよるが、小宮順一の場合はその前者に属するものと思われる。その意味でこの作も哀感のようなものが滲み出て、しかもその上ほほ笑ましさを感じさせる。

以上、小宮の作品とそれに対する私の思いを述べてきた。この生徒の詩の全体的な特色は、まず読んでみて、作品の対象に素直にはいれるという点にある。現代詩のもつ難解性に毒されていない清潔な感があり、巧みとまでは言えないにしても、比喩の具象化も適切

で、そこにある種のやわらかさを蓄えてきていると考える。観念的なものから脱し切れてはいないが、せいっぱいの努力の中に、現代詩的な抒情性を総合する立場を終始とっていると言える。

しかし、主題の深さ、あるいは重さをねらうことに反して、ことばが彼の美的な意識に限定され、それを読む者に鋭く迫ってくるというよりも、何か甘くせつないものの表示に終わらせるのではないかという懸念もある。それゆえに、彼がなおこうした立場を取り続けるためには、対象の掘り下げ、ことばの追求をより高めていかなければならぬように思うのである。

次に、吉田政司の詩を取り上げながら、彼の持つアイロニーがどう展開されるかを追ってみよう。もっとも彼は、アイロニーは骨格であって、外部世界と内部的な世界へのプロテストニヒリズムによって築き上げられているという。いずれにしても、三人の中で最も変わった作品を書く生徒である。

### 空神様

うっそうとした町はずれの森に立っている

にやけた男が立っていやがる

イヒイヒヒと泣き声とも笑い声ともつかぬ雑音を提供しながら

あたりを見るともなく歩くともなく

彷徨し続ける

うら寒き隠沼につばを吐きかけた奴がいる

よせばいいのに飛び込みやがった

水の年輪が呼びかける

ついでおまえさんも来てごらんと……

また静寂がやって来る

奴の石頭にも押入るに違いない

やあー君オッスおまえかと泣き求めながら

どうしてくれるんだねこの病気を

ハッハハハ俺は知らないよ勝手にしなよ

まあそのうち神様にでも聞くんだな

(第七号 43・2)

一口に言って、現代人の持つ精神的な空しさがこういう詩を書かせるのかと思う。自由奔放なことばから、何かしらひやかしのようなものを感じさせる詩である。

### 大掃除

おい／＼おいおい

無理すんなよ

本当の事を言えよ

そう肩をいからせるなよ

本当の事を言って

怒られたって殴られたってかまやしないさ

そうじゃねえか

それでも駄目なら

くるくるばいさ

蹴とばしてやれよ

かまやしないさ

実際ほとんど屑なんだから

捨て場がなくて困ってるんだそうだ

火をつけりゃ火事になりゃあがる

転がしときゃあ目障りになるし

どうにも手のつけようがないらしいや

もっとも俺はその間を

真直ぐ通り抜けるけどさ

まあ君の言うことぐらい聞くだろうよ

君の話は面白いそうだから

まあ気長にやり給え

俺は眠っているから

(第八号 43・3)

他の生徒にはない、非常に異質なものがそこにゴロゴロしている。それによって絶えず足もとをすくわれそうな感じがする。意地悪く解釈すれば、ヤケクソの心、良く取ればニヒルな心、個性的で良いがやはり詩作はより切実で、より真剣な人間の生きることへの探求でありたい。

可愛い人

あめーば状のびすとるが泳いでいます

その口径で私の微かな秘密を叩きます

病んだ小さな肺はその弾丸に血も出ません

生きていますのでしょいか

こんなに炎が燃えているのに  
びすとるは一片も溶けません

おとき話が笑っています

でたらめを言うなとその口ばしで

私の目をつつきます

0・2の視力が0になりました

あやつり人形です

青白い影法師のうらぶれです

あのような言葉を

バイブルにしたのが悪かったのです

「愛」には空洞しかないのです

サタンだったので

鉛色の鎖を引きずって歩きます

今は黒い一本の竹のつえが

何よりもごちそうなのです

もう言わないで下さい

私は黙っています

それしかできません

(第九号 43・4)

散文の論理を完全に破っていて、それでいて不連続の連続があり、ここに彼の詩としての新しい方向が打ち出されてきたように思う。本格的な問題として、対象を冷静にながめ、比喩の用い方も今までと違ってきてきているが、感情が独自の読者の思想を何らかの方向へ誘起させるといふ点では、いまだしの感がある。

わたし  
自我の完全な絶望は

やさしい白骨体が一枚の紙片に

つまずきながら

廃虚と化した真空地帯にやってきた

君は昔 赤い童話が好きだったそうだね  
白色の笑い話もね

でも今 私は透明のかけらしかないのですよ  
その紙片には

(死に場所教えます委細面談にて)  
すれちがう白骨に裏側に背の中に  
楽しい幽霊を幼児たちが誘う

そこでもまだ生きているのかな  
(偶然的にさえも)

灰色のもっとも灰色の肉身に  
いならず者が来てわたしを奴隷にしてくれた

君、

君は言ったろう

僕は純粹だと

平凡真顔で言ったようだけど

あの人なんだよ

結着をつけて君に言いたいところだが

純粹ごっこは猫にもできるさ  
人間遊びはでたらめだってさ  
でたらめだね

君のカルテは

もう死んじまいなさいよ

砂利石に喰いついた人殺しが

正義の道を教えてくれた

だけどそのまま宇宙船でどこかへ

行っちゃったと君が言ったけど

自己嫌悪の部屋を爆破したけど

もったいないかい

飛び散った腹腸はちぎって集めるの？

三つ折の心臓に用があるから

ドアを蹴ったら

もったいない

おれがそんなに嫌いかい

形容詞はごめんだぜ

黒い火山に行く道は？

駅前のタバコ屋さんに聞いてごらんなさい

もうはまゆうが咲いているでしょう

困った困ったお金がなくて困った

無定形の暗室の朱ぬりの  
ジェットコースターが好きで  
五十円も払っちゃいないけど  
風が俺を叩くから  
来なくちゃいけないように思った

(条十号 43・5)

「やさしい白骨体」「赤い童話」「白色の笑い」などのことは  
に、この生徒流の思考がこめられている。いわば論理を乗り越えた  
ところに作者の表現しようとするものがあるので、それだけに、そ  
れが一体何であるかをつきとめるのが困難な詩になりつつある。こ  
とばの端々にニヒルな笑いを感じるが、全体としてのイメージが構  
成されにくいのが欠点のように思う。

暗室でスベードが

そんなものはないと言っている

置き忘れられた棺おけの微笑が  
落葉のたましいを浮き出させるから  
慢性神経症は酸化するの  
ヒトリポッチガジンセイヨノ

めった切りめった打ちにされた  
軽石の脳味噌は五十円

黒衣のペテン師がそいつを  
えぐり出し なぶり 踏みつけ

そして どぶ川にダンピングする  
ヒソウね

捨て場のないゴミくずは火炎放射器で  
こがします

そこに星くずがころがっているから  
漂流のアカエイは固定する

噴霧器から抜け出たびすとるが

三角形板に鉛のα線を乱射するが

そこにはもう夢の破片は散ってこなかった

干からびた死の旋律を奏でおるごおるに  
半死のアフロディテの神が

呼応し

眠たげな視線を返す

だから ナイフを首につき立て

青白い血でも吐きたいの

サヨナラだけが人生ヨノ

明日はどこかへ行きましよう

(第十一号 43・6)

作者の心象の具象的表現として高度化してきた点は認めるが、や  
はり観念的な面が強くて、即事即物表現としての課題が残る。「ヒ  
ソウね」「ヒトリポッチガジンセイヨ」と言った表現は嘲笑的な作  
者の眼を感じさせておもしろいが、そのことがかえって禍して全体  
をぶちこわしている感がある。

以上が吉田という生徒の詩の傾向である。全体的には、表現がま

ことに自由奔放であることを特色とする。ただ、私には次のようなことが疑問として残る。内容面がことばに寄りかかっている、そこにふざけたところが見出せる。これは、ことばの遊び——ことばに振り回されて、表現のための表現に終わる危険性をはらんではいないかと。

こうしたことを先の小宮順一は「吉田政司の脳細胞分解」と題して次のように述べている。

「彼は現代の活字に寄りかかっているのである。これは現代に生きる詩人(?)として好ましいことでもあるが、一方では、受動的な姿勢を見る。活字にはんろうされるだけではないかと、不安になる。彼は未来への創造と能動的姿勢と独自の解釈をよく説くが、彼自身まだまだ既成概念や与えられた活字に縛られているのではなからうか。」

とまことに手厳しい批判を加えている。

この生徒の詩は、実感としては彼のもつエネルギーの放出である。だが、冷酷な現実への全身を持って対しているのとは違い、どこかしら面白がってことばの調子にのっかっていると見るのが偽らぬ感じである。次元の違う事物への認識がそうさせるのか、彼の詩精神は現実に対してたたかいたを挑むのではなく、どうにでもなれとの軽いニヒリズムがちらほらと潜在している。

厳しい批判を下せば以上のようなことが言えるが、いずれにしても非常に個性的なものを持っていることは事実である。

最後に、原勝政の詩について考えてみよう。彼は、これといった詩を書き始めた動機は存在していないと言っているが、ある種の「心の飢え」を感じたところから出発したのではないかと推察す

る。彼の詩は、実に粘っこい感覚として表現される。その点を十分読み取っていただきたい。

### 冷たい風の吹いた夜

黒染めのあすふあるとに

幼児の潰れた腹腸の臭いがする

微かによみがえる思影はない

冬の空に響く靴音の哀しさ

隠れた幻の感情は疲れ果てて溜め息をつく

冷たい夜風だ

女の肩は激しく泣いているが

血に染まった幼児の髪は震えない

耳許で微かにささやく並木の病葉

攫せた魂は路上を彷徨い

復讐のびすとるを蒼白い空に発射した

原型もとどめない玩具のびすとるで

ああノ錆びついた架空線の泣き声

砕け散った瑪瑙の灯は皓々と輝やいていて

無惨な幼児の肉塊に降り注ぐ

黒染めするあすふあるとには

幼児の最後の告白が今もその余韻を残す

濡れた水銀の粒は

外套を通して

鉄の盾を真紅に変え

激しい怒りに全身を震わせている  
灰色の星が輝く空を仰いで  
女はさめざめと泣いた

(第八号 43・3)

中国詩壇の選者、杉本春生氏がこの詩を評して次のように述べられて  
いる。

「この詩には粘っこい特異な感覚があり、作者の孤独とマッチして、暗うつなイメージをくり広げている。萩原朔太郎の影響らしいものがうかがわれるが、必ずしも会心の作とはいえない。今後が期待される新人である。」

ただそうするだけさ

双眼鏡で狂い咲いている桜を

観ようとしているんじゃない

ただ、戦車の上に立って

腐った世界のどて腹に

火薬をつめた鉛を一発ぶち込みたくて

飽きもしないで

じっと照準器を覗いているだけさ

こんなか細い短剣で

世界中の獣どもを相手にしようとして

いるのじゃあない

ただ、余りにも自分を見ないで

鏡の前にふんぞり返っている奴の

頭の中にダイナマイトを取り付けたくて  
ざるのような脳みそに

知恵の雨を注いでいるのさ

松の枝から釣り竿で

幸福なんぞ釣ろうとしているのじゃあない

ただあんまり地上が騒々しいから

役にも立たない虫けらどもを釣り上げて

腹を空にした鴉の餌にして

やろうとしているだけさ

こんな腐った泥沼の崎に立って

飛びこもつとしているのじゃあない

ただ、お前たちが溢れている大地の上よりも

ちよっぴり海の方が静かだろうと思えたから

俺も住める余地があるかどうか

覗いているだけさ

(第十号 43・5)

道具

爆弾を腹にため込んで

どぶ川の橋に両ひじをついたまま

若い女が公園の芝生の上で

解剖されるのをじっと見つめていた

血まみれのナイフとハサミとピンセット

その中の一人が私にどこかへ行けと

眼で警告を發している

こいつらは

解放軍のゲリラ兵なのだ

内臓が陽光にきらきらひかる

腸がどぶ川に放り込まれる

だが

女にとってそれは快樂なのだろうか

黒い瞳は妖しい笑みをうかべ

奇妙なほどながすぎる細い手を

ぶらぶら振っているではないか

私の心臓を狙っている

何と悪かな！

私の肉体に無の銃弾が容赦なく

喰い込んできた

電気衝撃のような快樂の一瞬時

私の頭蓋骨が肉片の雨の中を

どぶ川の方へ飛んでいる

あの女は

まだ笑っているのか

(第十号 43・5)

いつまでも変らずに

苦しみは白樺の梢から疾風のように

愛の炎の中で広がった

誰でも口にする「好き」という言葉は

むしろ遠くの碧嶺の麓あたりが笑っている

そして今まで幾度となく

告げていたのは見知らぬ懐しさのせいだった

△愛は孤独な者への灯火と

いつまでも変らずに 私に語って

欲しいのです▽

陽の光がたわむれる

ここまで歩いてきたのだが

愛の炎は眩しく

誰でも育てる「好き」という青いつぼみが

昨日は振り向きもしなかった

路傍にはえているのです

私らが 微風に胸を張って

告げているのは 明日に向けて流れる

あの白い雲たち

△愛は孤独な者への灯火と

いつまでも変らずに

私に語って欲しいのです▽

(第十一号 43・6)

軽やかなということばは不似合いであるが、今までとは違ったり  
ズムの発見できる詩である。「渴れた」という感じより、この詩に  
おいては、抒情がリフレインと共にかもし出されている。作者の  
「求める心」がありながら、ほんの一瞬の満ち足りたものを同時に  
見出せる。

この他に多くのすぐれた詩があるが、紹介しきれないので残念で  
ある。

彼は、全日制からある事情で定時制に編入した生徒で、最初は暗  
い陰のある者という印象しかなかった。ひとたび詩数十編をつきつ  
けられた時、私は脳天を鋭くたたきめされた感を抱いた。その詩  
に、彼の才能のひらめきを感じ取ったからである。それだけに、彼  
の詩の持つ価値を正しく評価しなければと、私は慎重にならざるを  
得なかった。さいわいに、私のところに中国詩壇で有名な詩人、末  
田重幸氏がおられるので、その指導を仰ぐことになった。同時に、  
先に記した中国詩壇の選者の杉本春生氏に評を請うて、彼の指導に  
当たったのである。

彼の場合、詩の書き始めから非常に感覚的なことばで語られてい  
て、私などが指導する余地はないのだが、私は私なりに彼の詩を次  
のように把握している。

彼の詩は、当初は自分の認識した知的な世界を抽象化しながら表  
現して、きわめて特異な詩的世界を構成していた。詩の語句も、感  
覚的、具象的で、他の生徒にない暗示的要素を含んでいたが、詩全  
体が即事的即物的でなく、観念的な世界を描くというアンバランス  
な状態にあった。それが、「道具」あたりから詩全体が具象的なイ  
メージとして形象化されてきて、詩としての新しい世界が展開され  
てきている。このように考えたのは、「道具」の中で展開される光  
景が心象風景として異様で、現代社会の非情さに押し流されそうな  
われわれに、ふとこんな心象におそわれる瞬間があるからである。

そういう点、私的なものがことばという現実を通して、客観的な  
ものに変えられていると見るのである。

ただ私が心配するのは、「道具」のような病的次元でのみ詩が語  
られているのではないかという点である。萩原朔太郎の詩の価値を  
云々するつもりはないが、鮎川信夫が語るように、「幻覚化された  
次元の象徴的脈絡においてしか、人間の意識の全体構造を示しえな  
かったところに詩人的限界があった」ということばと、この生徒に  
相通するものがあることを懸念するのである。しかし、今の段階で  
そこから脱し切れと要求するのは無理のように思う。生得的な資質  
や生活経験もあろう。やはり、自からのからを破るのは、自らが気  
付いた時の方がよいと判断するからである。

### 三

私は、傍観者立場で彼らの詩を眺めてきた。それは、私の路線に  
乗せたくないからである。彼ら自身が悩みながら進む過程におい  
て、自分達の手で掴んだものが、はるかに価値があると考えるから  
である。また、彼らも私の気持ちを汲んで、三人三様の独自の詩の  
世界を構築してきている。印象批評しかできなかった私は、時折、  
彼らから解放されたいと思いつつとこまできたわけだが、  
約二年間の足跡を眺めやっつた時、そこに素晴らしい世界の展開を見  
る。私の役目はここで終了しようとしている。今、私の頭にあるの  
は、彼らの詩活動を通して得たものをどのように生かせば、自己表  
現としての詩作を望んでいる多くの生徒の指導が可能か、というこ  
とである。このことは、次稿で触れながら全体のしめくくりとした  
い。

#### ⑩「現代詩作法」——鮎川信夫（思潮社）

（執筆当時、広島県立国泰寺高校教諭 現在、広島商業高校教諭）